

コスタリカ共和国とその教育

在コスタリカ日本大使館付属サンホセ日本人学校
校長 平野 覚

1. コスタリカ共和国の概要

① 生活の様子

国土の広さは、九州と四国を合わせた5万km²の小さな国である。人口は約440万人、ほとんどが首都のあるサンホセ市とその周辺に住んでいる。北緯8度～10度以内に位置しているため、海岸での平均気温は30℃を超える。そのため、住民の多くは標高1000m前後の中央高地に住んでいる。サンホセ市も同じ高さに位置し、常春の気温が1年中続く。北海道から派遣された私は、家の中では半袖、短パンという姿で1年を通して冷房、暖房機を必要としない快適な生活を送ることができた。

消費税は13%の国であるが、食料品には課税されていないので物価は安く、輸入品（関税が高い）などを買って贅沢しなければ暮らしは楽である。

ただ、発展途上国なので、ライフラインは整備されていない。道路は国道でもガードレールがない、穴があいている、側溝にふたがない、信号が故障するとすぐ直らない、橋が狭く1車線分しかないなどがある。上水道は、飲料可能であるが、塩素が多い。下水道は完備しているが下水処理施設がない。川に垂れ流し状態である。国立病院は無料であるが、多くの患者が詰めかけ1日がかかりになる。

ペンションード政策をとっているため、アメリカからの年金生活者が多くなっている。そのため、高級食材を売っているスーパーや大型のショッピングモールが進出してきている。そのほか、アメリカのオフィスデポ（文房具）、プライスマート（量販スーパー）、ビックマック（ハンバーガー）など有名店もある。

また、中南米のどの国も問題を抱えている麻薬は、この国でも大きな問題になっている。近年麻薬の中継国（南米からコスタリカを経由して主にアメリカへ）から麻薬の消費国に変わろうとしている。主要な産業である農業が、アメリカとの関係で成り立っているため、アメリカの影響をいろいろな面で受けている。アメリカの消費文化がこの国にも押し寄せてきている。

そのため、この国は「誰もが貧しかったが、心が豊かであった」時代から、大きな格差のある国に変貌しつつある。日本が「誰もが中流であった」時代から格差のある国に変わってきているのによく似ている。この格差と麻薬が、犯罪を多くし、治安の悪い国に現在はなっている。

この国は政治的には安定しているので、中南米諸国でよく見られる、ゲリラ、反政府分子による誘拐や爆破事件はない。しかし、拳銃が比較的簡単に手に入れることができる国なので、拳銃強盗が多発している。道路を歩いていると、信号で車を止めると、ATMから出てくると、乗り合いバスに乗っていると、このように生活のあらゆる場面で襲われた事例がある。もちろん発生の頻度は日が暮れてからと早朝に多いが日中でも地域によっては発生している。サンホセ市内の多くの家は、窓とかドアを鉄柵と有刺鉄線で囲っている。私の住んでいたコンドミニオは、25軒ほどの家を高い塀で囲み、出入り口には鉄製の頑丈な扉とそれを開け閉めする拳銃を持った

ガードマン2人で守られていた。スリや泥棒も多いので日本のようには住めない。日本では人通りの少ない田舎道にも自動販売機はあるが、この国ではサンホセ市内の中心部でもお目に掛かることはなかった。この治安の問題がもう少しよい方向に向かえばこの国は、もっと住みやすい国になると思った。

国民の85パーセントが、ローマカトリック教徒である。日曜日は、どの教会も、入り口まで着飾った人々で溢れている。

クリスマスの準備は、9月ぐらいから始まる。大きなスーパーでは、クリスマスの飾り物が売られ始める。日本の年の市のようなクリスマス用品を売る店が街角に10月下旬頃から現れる。クリスマス以外にもキリスト教に関わる行事が1年を通してよく行われている。

② コスタリカ人

治安が悪いが、出会ったコスタリカ人は、陽気で親切で世話好き話し好きな人が多かった。道路で行き先を尋ねると、私の片言のスペイン語を辛抱強く聞いてくれて、詳しく教えてくれる。ちょっと知り合いになると私が分かっていなくても何回も話しかけてくる。

家族や一族を大切にしている人が多かった。祖父、祖母の誕生日になると、午前中からパーティが始まり、近隣の親類縁者100人近くが、入れ替わり立ち替わり訪れ、祝福する。宴会は夜遅くまで続くことがあるという。縁遠い親類が田舎から出てきても、自宅に何日も泊めたりしているのを見た。このように親類縁者を大切に、助け合う気持ちは、キリスト教の影響もあると思うが、貧しかった中で分かち合う習慣が形成されたものではないかと考える。人と人の絆が強い国だと感じた。

日本人も親類、隣近所が助け合って生活していた時代があった。近年、町内会がなくなった所が札幌にも出現したと聞く。この面ではコスタリカがうらやましかった。

中南米に共通している、日本人ほど勤勉でないところや一時の楽しみを優先して有り金を使い切るところは、この国にもある。修理屋さんが予約した日時には来ないのは当たり前という事には、最初戸惑ったが、こういう生き方も有ってもよいのかなどこの国に住んでいると感じられてきた。

2. コスタリカの教育

コスタリカに赴任する前、何人かの人たちから赴任先は、教育に予算をかけているという話を聞かされた。(国家予算の21%が教育予算)そのため、この国の教育制度に大変関心を持って赴任した。赴任して直ぐに制服を着て通う子供たちの姿を見て義務教育が制度化させているのを感じた。

だが一方、街の中で英語を使うと、ほとんど通じないという現象にも出会った。簡単な英語でも通じないことが多かった。この国は日本より早く小学校段階から英語教育を取りいれているはずである。調べてみると1997年(平成9年)から全ての小学校で英語教育が開始されている。

それらの子供たちが成長して働いている現在、もう少し社会の中で英語が使われていて当然と考えた。このことからこの国の教育制度は充実していても、その運営がうまくいっていないのではと考えた。

① コスタリカの教育制度について

コスタリカの教育制度は、日本と似ているところがある。まず義務教育期間は9年間で同じである。日本の小学校に当たるエスクエラ (e s c u e l a) は、6年間、次の中等教育コレヒオ (c o r e g i o) は5年間であるが、義務教育は前半の中等部の3年間だけである。義務教育を終えると、中学部3年の進級試験に合格すると同じ校舎内にある高等部へ進学する。高等部は2年間である。大学ユニベルシダ (u n i v e r c i d a d) へは高等部卒業時にコスタリカ教育省が実施する国家試験 (p r u e b a s n a c i o n a l e s d e b a c h i l l e r a t o) がある。これに合格すると大学入学の資格を取得できる。ただ、資格を取ればどこの大学にでも入学できるというものでもない。コスタリカ大学のような有名国立大学は、国家試験の成績がよくないと入れない。

この他に、就学前教育が見直され、1998年より就学前教育1年が義務教育化された。公立の場合は小学校に併設されていることが多く、キンデル (k i n d e l) と呼ばれている。(4歳から6歳が対象)

実は、この日本と似ている教育制度が歴史的に見ると、コスタリカの方が早く始まっているという事実がある。コスタリカは、独立して間もない頃から教育に力を入れてきた。1869年(明治2年)の憲法で初等教育の義務化と無償化を設定し、2年後にはその義務教育を女子にも適用し、教育の機会における男女平等が制度化している。これは、1886年(明治19年)の小学校令によって義務教育が始まった我が国より早い時期に制度が整えられたことが分かる。

このように、コスタリカの教育制度は、我が国に似ているのではなく、我が国より先行して行われていることが分かる。幼児教育においても義務教育化が先行している。実は、私が問題意識を持った英語の小学校への導入も、同じく早く取り入れられている。

② 教育現場の視察

早い段階で教育制度が整えられ、また、この国の象徴的な施策である、軍隊を持たないで、軍事費を教育に充てるという、制度と内容がともに充実していると思われる現場を見る機会を得た。

2年間の派遣期間に5校の学校を見ることができた。公立校4校、私立校1校である。公立校の1校はコレヒオ、残り3校はエスクエラである。最初に訪問したのは、サンホセ市から車で30分ぐらいかかるカルタゴ市にあるパドレペラルタ小学校 (Escuela Padre Peralta) である。

学校に近づいてまず感じたのは、住宅街のどこに学校が存在するのか直ぐには分からないことである。日本では、まず、広いグラウンドとそれを取り囲む金網が遠くからでも見つけられる。ここの小学校は、ほとんど自前のグラウンドを持っていないのと校舎がロの字型に作られている場合が多い。そのため、住宅街に埋没しているため見つけづらくなっている。私立校をのぞいてその他公立校はほとんど同じようであった。



③ 教室の様子

校舎の中庭を囲んで教室がある。警備上の問題か、どの窓にも鉄の格子が外側についている。教室には、30人以下の子供たちが学習していた。日本の40人学級よりも少ない。教室の面積が日本より小さいようだ。教室に入って驚いたのは、子供たちがノートを持っているが、教科書がないことである。全く使われていなく、教師がプリントを毎日渡して授業しているクラス。教師が自分で教科書を選定し、その本を人数分コピーし簡単に製本して使っているクラス。ノートだけを使用しているクラス。教科書は教師を選定するのであるが、この地区の子供たちの親は教科書を買うゆとりがないことが、後で校長先生の話から分かった。



短い時間に各教室を見て回って気がついたことは、教材、教具を使って授業を展開しているところはなかった。ほとんど、黒板とチョークだけで行われていた。そのためか、教室に子供たちが授業で創り上げたものが見あたらなかった。特に、最後に訪ねた高学年の音楽の時間は、黒板一杯に書かれ文字を子供たちが一生懸命写しているところであった。その教室の楽器は、教師が持ち込んだギターだけである。授業の大半が先生の話と説明のために書かれたことを写すことであった。授業の最後に私たちが訪問したので、全員で歌を1曲、歌ってくれたのが、その時間の唯一の音楽的活動であった。

4年生のスペイン語の授業、児童数は23人。子供はノートを持っているが教科書はない。教科書は先生が持っているだけである。授業の途中でプリントが配られ、その問題を個人が解いたり、全体で学習したりする。それが終わるとプリントをノートに貼り付けて学習の記録とする。

2年生の同じくスペイン語の授業。児童数18人。この教室も教科書はない。授業中に教師から話を聞く。読解力をつけることが第1の課題である。2年生であるが、学力に差があるのが問題だと話していた。

④ 見えてきた問題点

音楽の授業は、極端な例であることが、その後訪問した学校によって判明したが、授業の中で子供が活動して理解していくという場面が少ない展開が多いことが分かった。簡単に言えば、先生からの教え込みである。子供の問題解決になっていないのである。もちろん、子供を活動させるための教材・教具が揃っていないことも大きな要因だと考えられる。時間割※には、C I E N C I A S（科学）という教科があるが、理科室はなく、学校の中を見て回ったが、実験器具らしきものはなかった。過去に現地の小学校に通学し、日本人学校に転校してきた子が、転校して一番面白かったのは理科だと話していた。現地校の科学はほとんど先生のお話であり、日本人学校は実験や調べ学習が中心であるからというのが理由であった。確かに、器具や薬品がないと博物学的な理科になる可能性はあるが、子供の発達実態などを考慮すると、身近な材料や身近な植物、動物を使った授業が工夫されて行われていないことが不思議であった。

子供の活動が乏しく、先生中心の授業が、教育制度が整っているわりに、内容が十分でないことに繋がっていると考えた。この国では、授業の改善が急務の課題であると考えた。

⑤ 小学校の時間割

	時間	月	火	水	木	金
1	7:00-7:40	スペイン語	社 会	スペイン語	宗 教	スペイン語
2	7:40-8:20	スペイン語	社 会	スペイン語	宗 教	英 語
3	8:45-9:25	科 学	美 術	英 語	算 数	算 数
4	9:25-10:05	科 学	美 術	科 学	英 語	算 数
5	10:20-11:00	産 業	英 語	家 庭	体 育	農 業
6	11:00-11:40	産 業	スペイン語	家 庭	体 育	農 業
7	12:10-12:50	英 語	スペイン語	科 学	算 数	音 楽
8	12:50-13:30	算 数	算 数	社 会	スペイン語	音 楽
9	13:40-14:20	算 数	算 数	社 会	スペイン語	オリエンテーション

※ この学校は1部制をとっているが、多くの学校は児童数が多いため、2部制である。1部は12時頃終了し、2部は12時30分頃から17時すぎまで学習している。2部制の学校では曜日によって1部と2部の入れ替えを行っている。

産業と社会、科学と農業など違いがはっきりしないものもある。科学と農業を例にあげると、同じ生物を取り扱っても科学は種類の違いなど農業は生産に必要なものを中心に学ぶ。ただ、科学も農業も実際に体験して学習することはない。全て、教科書か先生の話である。

宗教は、カトリック教の教えになる。そのため、他の宗教の児童は履修しなくても許される。

⑥ 現状の問題点について教育省の見解

私が視察して気がついたことについて、教育省の専門家に意見を聞く機会を得ることができた。

こちらの教育省 (Ministerio de Educacion Publica) は、頭文字をとって通称M e p (メップ) と言われている。そこの算数と社会のアセソラ (指導、助言をするという意味)、日本で言えば指導主事のような役割を持っている お二人に意見を聞いた。

・算数担当のアンナさんの意見

学年ごとに進級試験があり、そこに合格しないと何年でも先へ進むことができない制度にコスタリカはなっている。子供たちは、勉強すること自体の大切さや楽しさよりも、その試験に合格するために勉強する。勉強の「動機」が違ってきてしまっている。それが大きな問題である。教師も合格できるように学習を進める傾向がある。そのため、知識に偏った教え方になっている。

・社会科担当のキロスさんの意見

教育の問題には二つのタイプがあります。

一つは教育内容の問題

1956年 (昭和31年)、コスタリカは、ローマ教会と CONCORDATO (コンコルダト) 宗教協約を結んだので、宗教国家となった。基本的に教育のカリキュラムは、その協約によって内容が決められている。特徴的なのは、性教育。また、理科での人体の学習はとても難しい。(どの点が難しいのかは、具体的には聞くことができなかった) 理科の先生と宗教の先生との衝突は、多々ある。

もう一つの問題は、事務系の問題です。(この事務系と言うのが、紙と鉛筆を使った授業という意味のようであった。)

実際に、コスタリカの教育方法自体が非常に古くなってしまっている。植民地時代のものとあまり変わっていない。教育界内部で「事務哲学」と名称する人もいるぐらいである。昔ながらのやり方、つまり紙をたくさん必要とするやり方になっていて弊害を作っている。それが、私立学校と公立学校の差を生み出しているとも言えます。この事務系の問題を解決するだけでも、私立と公立の差は激減すると思う。

現在は、紙の上だけの勉強より、ビジュアルな学習が可能になってきています。教師の中でもそういうものを取り入れたいと願っている人もいます。

しかし、教育省はピラミッド型になって融通が利かない。(なぜ、ピラミッド型になっていると融通が利かないかはよく分からなかった。予想するにトップの考え方が古いままであると言いたいのもかもしれない。)また、各学校の校長先生も古い考えの人は、新しい情報を隠したり、教師がよいものを取り入れて成長するチャンスをつぶしてしまったりすることも多くあります。これは、是非解決したい点です。

中学を卒業すると試験があり、それに合格しないと進学できません。そのためこの試験に合格するための勉強に偏重するようになります。体験学習は後回し、知識偏重の教育になっている。

また、コスタリカは昔から、フランスやスペインの真似をしながら教育システムを考えてきた。ですから、理論ばかりの言葉を多く使った(スピーチのような)教育を重要視してきた。今は、ビジュアルな情報が子供たちの生活にどんどん入ってくるので、紙の上だけ、言葉だけの授業を行っている先生は、生徒が馬鹿にするようになってきている。

これが、コスタリカの教育危機の理由の一つです。先生方のメンタリティ(意識)をどうやっただ変えることができるのか・・・重要な問題である。

以上がお二人の話の内容である。通訳を介しての話し合いであったので、十分真意をくみ取れていないかもしれないが、教育省が目指している体験的な学習を取り入れた授業がなかなか現場で見られなかったわけが理解できた。

・教育省担当官のまとめ

要するに、この国特有の進級試験制度、宗教的な問題、フランス、スペインを模倣して始まった教育の伝統、この3点が知識偏重の教育を確固たるものとしている。世界のグローバル化によって、この国にもたくさんの情報が入ってきて、子供たちの意識や実態が変わっている中で、古きをよしとし、改善が進まなかった現場が危機に瀕していると言うことである。これは、我が国にも内容は違っても似たような現象がある。

3. 帰国報告書のまとめ

日本人にはなじみの薄い国であるコスタリカ共和国について知ってもらうことと、この国の教育制度と運営から日本の教育の改善につながらないかという視点で帰国報告書を作成した。概要の中では、コスタリカの自然について触れていない。それは、最近この国の自然の様子がテレビ番組で何度か取り上げられていたからである。自然の豊かさを身近な例で紹介すると日本人学校の敷地には、葉きりアリが行列を作り、花の蜜を吸いにハチドリ飛び交い、バナナやマンゴーが

実をつけています。市内であってもこれだけの自然が残っているので、国立公園ではたくさんの動植物が見られます。まさに自然の宝庫です。これを付け加えておきます。

サンホセ市内で英語があまり使われていない現状から問題意識を持って、教育制度と制度の運営面について調査してみて、コスタリカの教育の中にもたくさんのよさやこれから日本でも行った方がよいと思われるものが見つかった。

制度面については、必要と考えたものを直ちに取り入れている。小学校における英語の導入。導入に際しても、週3時間以上と始めから英語が身につく時間を設定している。幼児教育の義務教育化も先進諸外国と肩を並べて導入している。この躊躇無く必要とするものを効果があるように取り入れる姿勢は見習う必要がある。

また、学校経営の上では、自分の学校を公の予算に頼らず、自分たちの力でよい学校を作っていこうという意識（現状は施設、運営面に限られている）は、これからの日本の教育にも必要になるはずである。特に、これからは地方分権の時代なり、その地方の財源によっては、十分な教育予算が確保できないことが予想される。その地方の教育の質を落とさないためにも、地域の学校が、地域の力を借りて経営することも考えられる。その面で、コスタリカの学校が、学校予算のために、ビンゴ大会など開催して収益を上げていることは大いに参考になる。日本でも、PTA主催のバザーや資源回収などで、幾ばくかの資金を集め、子供の教材購入等に使われているが、それは、運営費のごく一部である。教材や施設面の充実のために年度当初から計画を立てて目標金額を設定しておこなう事が近々のうちに必要になると思います。

我が国の教育も児童数が多い時期に知識偏重の傾向があったことは、間違いではない。その後、教室定員が40人になり、個々の子供たちに目が行き届くようになると、一人一人の考えを生かすような指導法が確立され、子供の考えにそった、あたかも子供が自分たちで問題解決できたように感じる事ができる指導法に発展してきている。そのため、多くの教室では、体験的な活動を取り入れた授業が構成されている。さらに日本の現場では、視聴覚機器が行き渡っている。コスタリカでは、コンピューターには力を入れており大規模校では、20数台が設置されていた。機種も比較的新しくあった。だが、子供の数に比べると少なく、ある学校では、能力のある子を選抜し優先的に使わせるような方策を実施していた。その他の視聴覚機器はほとんどなく。教室にはテレビも設置されていなかった。それに比べると、我が国は、各教室にあったOHPは、もう使われず、コンピューター画像を直接投影できる状態になってきている。これらの機器は、新しい情報やその地でない情報をリアルに示してくれる。子供たちが自分たちで調べ情報を交換し、それらを基に討論して、問題を解決していくとステップを容易にしている。

コスタリカに比べて、恵まれた環境にいる日本の子供たちであるが、学力の問題以後、学習内容が増えたことによって知識優先という教え方に逆戻りしないようにすることが大切である。コスタリカの伝統的な教え方が、現在のコスタリカの子供たちに受け入れられなくなっている現状を見ると、学習内容が多くなっても教え込みという状態は、避ける必要性があると感じた。

コスタリカの学校は、研修体制が日本の学校と大きく違う。日本は、学校の組織に位置づけ、また、経営方針にも研修の重点目標を提示し、研修部を中心に学校全体で研修を深める体制ができてきている。コスタリカでは、基本的に研修は、個人に任されている。そのため、各個人が習得した内容が学校全体に広まることはない。このような現状は、コスタリカの伝統的な指導法を変えていくのに障害になると思う。日本のような研修体制は、全体のレベルを上げるためにも必要であり、コスタリカでも検討すべきだと考える。

私の問題意識を芽生えさせた英語が日常的に使われていない現状は、知識偏重の指導法にあるという結論は明確には導き出せなかった。それは、限られた学校訪問では、英語教育の詳しい内容を調べることはできなかったからである。ただ、算数や理科、スペイン語の授業を見た範囲では、子供たちの体験的活動はほとんど無く先生からの教をノートに書き写すという授業がほとんどであった。教育省の担当者もこのような授業が続くと、子供に創造的な力につかないで、ただものを覚えることになるかと危惧していた。更に、子供が活動しない授業は、今の社会では、子供たちに集中力を生まないようである。

このようにコスタリカの現状から考えると、学力を高める上でも、創造性を高める上でも、集中力を高める上でも、日本の教育は、学習内容が多くなっても子供の活動を取り入れ、新しい情報を取り入れながら授業を進めることを更に続ける必要があると結論づけられる。

最後に、私たち派遣教員の主な任務は、日本人学校の子供たちに確かな学力をつけることである。そのため、この現地教育事情を調べる時間を多くとることはできなかった。また、コスタリカの治安は毎年悪くなる一方で、簡単に学校を訪問したりすることができなかった。詳しい調査が難しくなっている。そのため、十分な調査ができなかったり、裏付けが取れなかったりして、この報告書の中には、思い違いによる記載があるかもしれませ。それは、今後のコスタリカの教育の変化を日本で調査しながら正していきたいと考えている。



(サンホセ日本人学校の全校生徒と教職員)